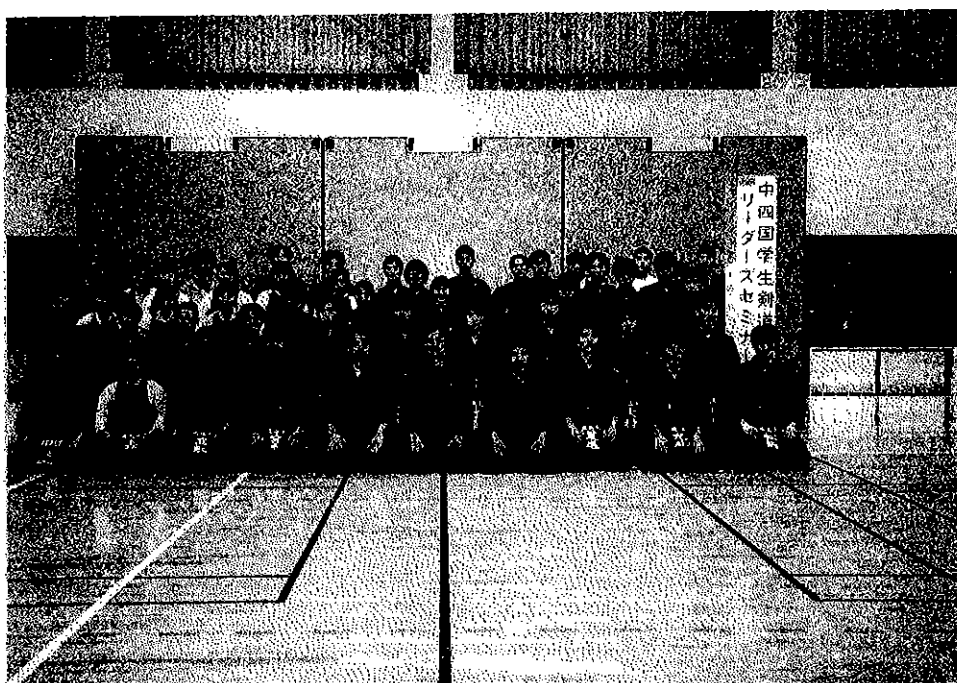


平成9年度リーダーズセミナー

H 9 . 4 . 5 ~ 6

於 鳴門教育大学



中四国学生剣道連盟

指導教官	大塚忠義
	木原資裕
	山神真一
学生責任者	柴田隆義

リーダーゼミ日程表

一日目（四月五日）

- | | |
|-------------|-----------|
| 13:30~15:00 | 合同稽古 |
| 15:00 | 宿舎へ移動 |
| 15:30~17:30 | ディスカッション |
| 17:30~19:00 | 講演会 |
| 19:00~21:00 | 懇親会（夕食含む） |
| 23:00 | 就寝 |

二日目（四月六日）

- | | |
|-------------|------------|
| 6:30 | 起床 |
| 7:00 | 朝食 |
| 8:00 | 鳴門教育大学へ移動 |
| 9:00~11:30 | 中四国リーダー選手権 |
| 11:30~12:00 | 合同稽古 |
| 12:00~13:30 | 昼食 |
| 13:30~14:30 | 反省会 |
| 15:00 | 解散 |

ディスカッション

今回のリーゼミでは、各大学における問題点を出し合ってそれについてみんなで話し合い解決策を見つけようと思いました。

まず3つの班に分け、各班に先生方に1人ずつ付いていただきました。その班分けは以下のとおりです。

1班・・・山神先生

岡山大 香川大 島根大 徳島大 徳山大
広島大 松山大 東亜大 吉備国

2班・・・木原先生

岡商大 高知大 鳥取大 広修大 鳴教大
高松大 倉芸大

3班・・・大塚先生

女子全員

男子については1班はある程度部員が多く活動が盛んである大学、2班は部員が少なく活動が思うようにできない大学で分けてみました。各班とも共通の問題は部員の減少でした。剣道人口が減少しているいま、どのようにして部員を確保するか？拮大学の勧誘の仕方など意見を出し合い議論した結果、新入生の勧誘を2年生にまかせきりにせず主将自ら動いて積極的に行動すること。次にせっかく入部してもすぐやめないように部内の雰囲気をよくすることが大切であり、特に先生とのコミュニケーションをとって雰囲気作りに取り組むといった意見が出ました。

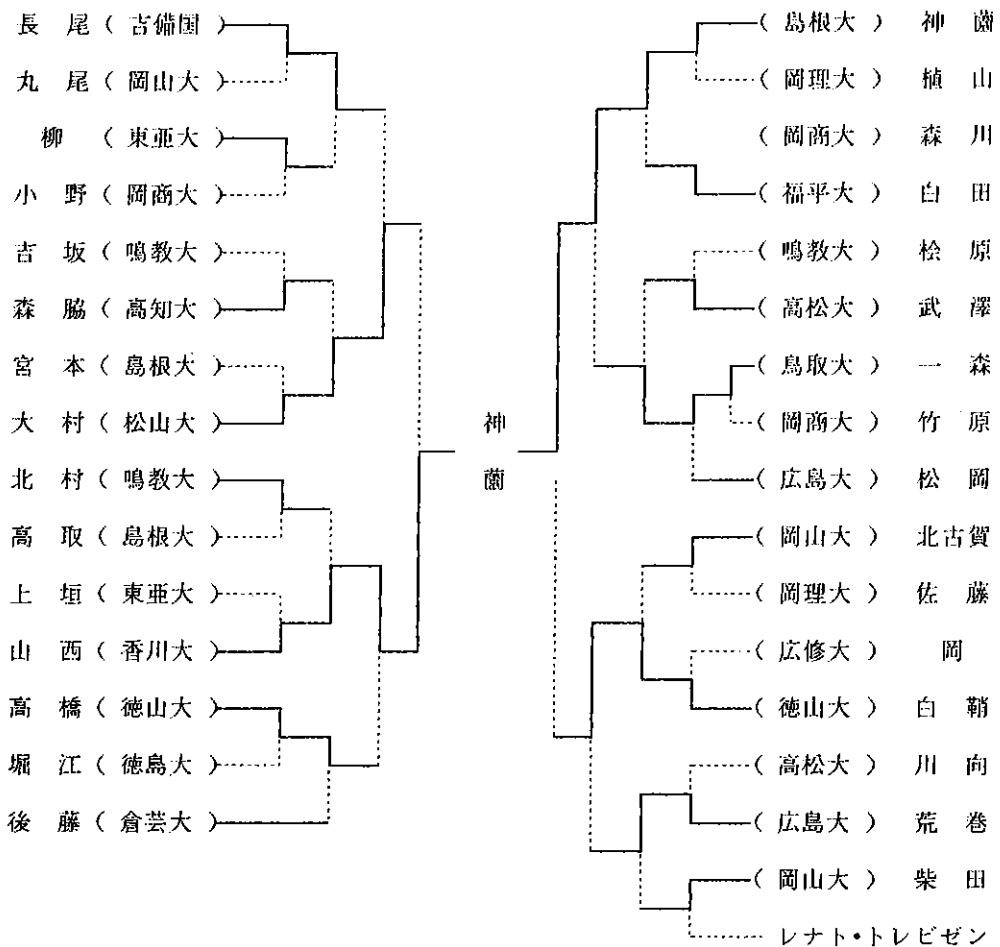
また2班の問題で個人と組織という関係をどのように上手にやっていくかという問題が出ました。2班は特に部員の少ない大学が多いせいもあってか特にこの問題が重要視されていました。部を組織として考えた場合、ある程度強制的に集合させて練習しないとムードができにくくまとまらない。つまり部としての活動ができない。しかし、部は個人がいて成り立っているのでありその個人の自由を束縛してまで部活をやらなければならないのか？といった個人と組織の境界にとっても悩んでいました。部員の少ない大学では部員確保と行った点では、個人を優先させていましたがこの問題はとても難しい問題で、部を運営する者にとってはなかなかまとまりにくいようでした。

そして話し合った結果、一度部員全員で話し合い目標を決める必要があり全員が自覚を持つ事が大切だということになりました。そのことが問題解決への最短の道でありより良い部につながるのではないのでしょうか？

第2回リーダー選手権

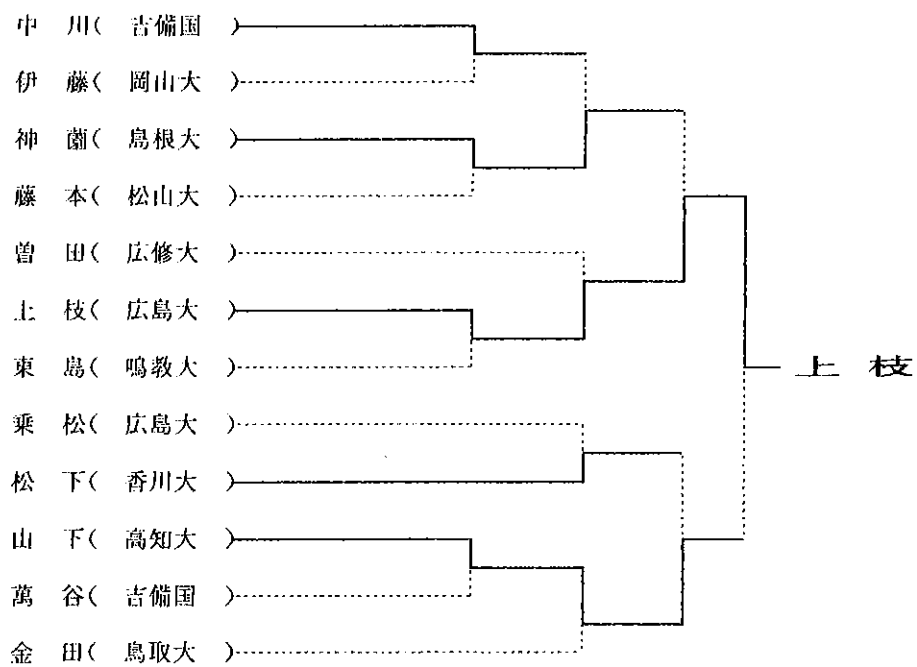
前回に続いて行われた第2回リーダー選手権も前回よりも出場者が多いこともあってか、とてもレベルの高い好試合がいくつもありました。試合はもちろんですが審判、掲示など普段役員の人達が行っていることも自分たちで行い、試合をみんなで運営したことは大変いい勉強になったのではないのでしょうか。また他の大学の人でも一本取ったりすると拍手するといった光景が見られたことはとても良いことだと思います。今回は世界選手権出場のイタリア代表の方も参加されてとても貴重な体験をすることができました。





男 子





女 子



私と剣道

堀江 幸夫先生

私は大阪生まれで、それも河内というみなさんには馴染みの薄い所なんですけれども、河内の金剛山という名を言いますと楠公さんということが昔から出てくるんですけれども、今ではちょっと皆さんには楠公さんと言っても誰だろうということだと思えます。とにかく大阪の南の田舎ということです。

私が剣道と関わりを持ったのは、10歳の時だったと思います。当時、喧嘩早いじめっ子だったのでおやじが心配して何かさせよう、精力善用ということだったんだと思います。私はそれともうひとつ憧れを持ったということは、当時やはり河内に四條畷中学を出て一高、東大といった安岡正篤先生という方がおられまして、この方は陽明学の日本的泰斗といわれ言うなれば人間学と言うんですか東大を出られて1カ月くらい文部省で勤められ、そして勤めをやめて自分で塾を開いて生涯を生き抜かれ、まあ昭和28年8月15日の終戦の詔勅に手を加えられた方です。今、日本の財界のほとんどの人、あるいは政治家の一部の人にも安岡先生に教えられたと言う人なんですが、この方が四條畷中学時代に朝から晩まで剣道ばかりしとった人なんです。親御さんが、特にお母さんが勉強せず剣道ばかりするというので心配されてたんですけど、なんとなく一高へ入られた。そして東大の試験の発表を見に行かれた所が、人間の情と言いますか後ろの方からずっと見て行ったところが前100番位で疲れてもう落ちたんだろうとあきらめて帰ろうとしたところで、友達にばったり会ってお前1番だということで1番で合格された方なんです。そういうように剣道をしながら東大を出たといった話に憧れをしっかりと持った気がします。そして同時に稽古して5年くらいしてから、ふと大阪の天王寺の武徳殿に稽古に行ったときにすばらしい先生に会ったわけなんです。その方は鹿児島出身の酒匂久先生という先生に巡り会って、その先生のすばらしい剣道に魅せられたということからいよいよ剣道にのめり込んでいったということでもあります。恩師は終戦後、私が終戦から帰りましたら剣道がもうすでにできない状態になっておったので、郷里の鹿児島へ帰られて、当時初めて選挙で町村長を決めるという制度になった時の第1号の町長さんになられたのですが、我々が長い間ご指導いただいた先生が町長になるということは、想像もしない事でした。そしてわずか43歳で亡くなったわけですが、その先生の後ろ姿をしとうて今日まで剣道を続けてこれたんじゃないかなという気がします。そういうこ

とで剣道との関わりあい、そういうことはやはりすばらしい師匠に会ったということではなかろうかと思えます。

そういうことで今日の話の本論に入るわけですが、私が稽古を続けて今日まで続けている間にいろいろな壁に突き当たりました。随分稽古をしてきたのですが乗り越えられない壁が幾重にもあったということです。どうしてこの壁を破ろうかということで、いろいろと暗中模索したわけですがそのうちふと目にとまった本、それが道元禅師という曹洞宗の日本の禅の創始者と言われてもいいくらいの方なんです、その方が福井県の永平寺を創建された方なんですけれどもその人が書かれた学道用心集、この書物は禅の修行をする入門書と言われる心得帳と言うことで道元禅師が書かれたものなんです、これが10カ条からできております。特にそのうち前の5カ条が剣道におき比べて見ますと非常に役立つということで、学道用心集をちょっぴり紹介したいと思います。



第1には「菩提心を発すること」これはどういうことかと申しますと、もちろん禅宗ですから仏教ということなんで仏教のそもそもの一番最初に開かれた方は、皆さんご存じのお釈迦さんでお釈迦さんのお説きになった真理を知ると言うことなんです。いわゆる仏教の本当の心を知って初めて修行の第一歩へ入る、これを剣道へ置き換えますとなぜ剣道をするのか、剣道は何か、と全剣連では剣の理法による人間形成の道だという説き方をしている訳なんです、ようは剣道をする

目的は剣の修行によっていわゆる技術の錬磨によって人間としてのありようを探っていくとそうゆう事になろうかと思えます。ですからただ漫然と面をつけ、箠手をはめ竹刀をもって相手と打ち合いをする、その打ち合いの巧拙だけで剣道の全てだというのではなくて、剣道は何か、それを通じて自分は何を求めていくかというようなことをまずしっかりふまえたうえで稽古をして行かなければ得ることが少ないのではないのかと。最近私の周囲でも高齢の方々がこぼされる言葉の中に「もう最近若い人は前に来てくれない」とそういう愚痴をこぼされる方々がたくさんおるわけなんですけれどもいろいろそれには理由があると思えますが考えてみるとなぜ剣道を今日までしてきたか、何故するかという考えを抜きにしてただひたすら竹刀を振りまわしてきた結果でなかろうかと思えます。私はその愚痴を聞きながらいつもそう思うわけです。野球で川上という巨人の監督がいました。現在も評論家として活躍されている人ですが。川上さんは私と同じ年なんです。その川上さんが30代の現役のときに打席に立つと球が目の前で止まる。だから打つんだという有名な言葉を残しております。当時、私はその言葉をきいて何と思い上がった事を言う奴なんだというような感じを正直いってもっていましたが、しかし私も最近になって目の前で箠手がとまる相手の箠手がとまる、面が見える、さあ、打ってくださいと言わんばかりの面が見えるというようなことがたまたまあるわけなのです。そこでかつて川上監督が言ったあの言葉は本当だったということがわかり、凄い人だったんだと今、しみじみと感心するわけですが、そういうように本当に剣の修行の目標がしっかりしておけばそのところまでいけるのではないかという気がするわけです。いずれにしても稽古をしている以上、剣道をする以上、どこへその稽古の目標を置くかということが一番大切なのではないかと思えます。

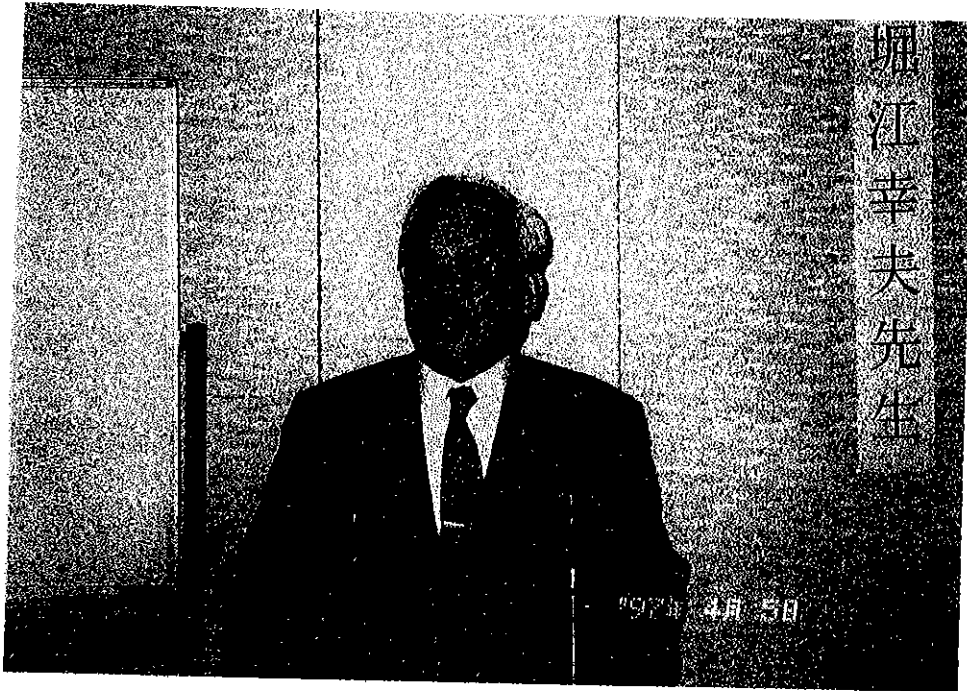
2番目には、正法を正しい方法を正法に乗っ取って稽古をして行くと、これを剣道に置き換えますと基本をしっかりと身につける、もっとも正しい方法をしっかりと身につける。基本の修行に卒業はありません。また、基本と共に忘れてならないのは礼法、特に最近よく稽古しながら感ずることは非常に礼法が乱れているのではないかと申しますのは、稽古の前後に必ず礼をしているのですが、ところが礼の仕方少しも上手になってこない。あれだけ毎日稽古するたびにしておる礼の仕方が一つも上達してこない。そういう感じを最近すぐうけるわけです。もちろん、日本の礼儀というのは3つからなりたっています。三儀という3つの

礼儀、1つ目は辞儀、2つ目は行儀、3つ目は書儀。この三儀をもって礼儀といわれているのです。ちょっと簡単に説明しますと辞儀とは言葉使いの事です。いうまでもなく相手によって言葉をかえるということは決していいことではないのです。常に相手を尊敬する姿勢があればくずれた言葉遣いはできないのですが、さりとして友達同士で肩肘はった言葉遣いというのもこれは面白くないことなので、一応相手をみて言葉を改めるという事が大切です。朝会えばおはようございます、昼ならばこんにちは、夜ならこんばんはと、そういうような言葉が自然にでる、また、自然に行われるということが辞儀ということだと思います。

2つ目に出て参ります行儀、これはいまさら言うまでもなく、一挙手一投足の節度という事だと思います。電車の中で狭い通路に足をくんで乗る人の衣服に靴の裏が触るということをもう平気でやっているのが現在の姿なんですけどこういうことで他人に迷惑をかけない、嫌な思いをさせない、そういう配慮が行儀でございます。



3つ目の書儀というのは、これは古い時代からせめて手紙は筆で書くくらいの字を心得ましょうということで、自分の名前、あるいは手紙ぐらいは墨をすって筆で書けるということが大切であるということです。そういう意味で基本をしっかりと身につけると、その基本が今申し上げた剣道で言う基本のほかに礼儀も含めてしっかりと正しく身につけましょうと言うことに置き換えられるのではないかと思います。



3番目は行ずるということです。剣道で言えば稽古をするということです。技をしっかりと稽古により磨いていく。とにもかくにもわたしどものやっている剣道というものは稽古をぬきにして語ることのできないのが剣道なのです。ですから、徹底的に稽古をする。徹底的に技術を磨くということが大事なので、昔から日本のことをことあげしない国といらんことは言わないのだということを言われてきているのですが、いらんことを言うなとっているわけではないのです。それはどういうことかといいますと、行ずることによって得たものをその上で語れといわゆる机上の空論はやめとけと自分がしっかりとやりぬいたその中で得たものを口に出すという意味で、ことあげせぬ国としゃべるなと言うわけではないのです。とにもかくにも、徹底的にやり抜いた上で得たものをいわゆる単なる知識の受け売りではなくして、いったん自分の腹の中にしっかりと入れて、徹底的に咀嚼して、そして自分の血内になったものを口に出すという意味でことあげせんという言い方をしているわけであります。その意味でもいかに行ずることが大変、大切かということになるろうかと思えます。特に剣道の場合、私は座右の銘を只管稽古、ひたすら稽古をするというそういう言葉を座右の銘として今日までやって参りました。これは禅宗の中に只管打坐、ひたすら座れ、なにも言うことはない、とにかく座禅するんだ、黙々と座れとそういう意味の言葉をちょっと拝借してきて座ることと稽古することをすり替えて拝借したわけです。そして最近では稽古

見性と、平たく言えば悟るという意味になる訳ですけど稽古することによって自ら悟かる。ですから、稽古すれば稽古するだけに壁に突き当たってどうしようもないことに何度か突き当たるという繰り返しの中で稽古をしていく。そうすると前の壁が少し風通しがよくなる。そして、得たりとまた頑張ればまた突き当たる。それをまた乗り越えてと繰り返しの中でだんだん稽古の何か分かりかけてくるのではないか。ですから、今は皆さんの時代は徹底的に稽古するということが大切なのではないかと思います。もちろん、剣道の場合、徹底的に稽古する、問答無用、とにかく徹底的に行ずる。やってやってやり抜くんだというそういうことで生涯、あらゆる次から次へと生じてくる問題を乗り越えていけると確信をもって言えるのではないかと思います。また、確かにそういうことが先程の川上監督の目の前で球が止まるのだという心境までいけるのではないか。そのためには行ずるということが大切なのではないかということでもあります。

4番目には「有所得心不可」。所得を期する心はだめですよ。これはどういうことかと申しますとこれをしたらこんな見返りがあるんだという計算ずくでやるようではだめだということです。一切合切、見返りを期待しない、純粋な気持ちをもちなさい。皆さんの知っているダルマさんというのがありますね。あのダルマさんは達磨という禪の大和尚をかたちどったものですが、この達磨大師はインドの人ですけれどもインドから中国にいったときに非常に仏教に力を注いだ皇帝がいたわけです。その皇帝が自分の国にたくさんのお寺を建てて仏教の信仰に非常に努力しておったときにそこに達磨大師がいかれたらしいのです。そこで皇帝はこれだけわしは仏教に力を注いでおるからどんな見返り功德がありますかという問いかけをしたようですが、達磨大師は一言「無（何もない）」と答えたそうです。皇帝陛下は、随分と不満だったらしいが手法を変え、質問したが達磨大師は「全て無」と答えたそうです。そういう伝説から道元禅師も有所得心不可というのをここに持ち出してみたのだと思います。これは剣道に置き換えたとしたらやはり自分だけが打って相手には打たさない、いい子になろうとだから2人で稽古をするので本来剣道の稽古というのを切磋琢磨なのです。お互いの欠点を指摘しながら向上していこうというのが稽古の心なのです。ですから、自分だけが打って相手には打たさないというようなことではだめですよと、そのように受け止めていけばいいのではないのでしょうか。打たさない、ということに心が働くといわゆる受け、守り、そういうもののこだわりがいわゆる心のこだわりというもの、

そういうことによってこれをしたらこれだけの所得があると、見返りがあるというのではなくして、さらっとした純粹な心、そういうものを大切にしましょうという様に受けとめていただけたらいいのではないかということです。もちろんここで一番考えないといけないことは、理業一致という言葉があります。技と心の関係を図解してみますと、仮に出発点が初段、貳、參、四段と考えていくと初段のときは全てが技であり、心の分野はまず本当にはしの先でつuitたくらいしかない。五段くらいまでなると技と心の兼ね合いが半々位になる。そのあとはほとんど心がウエイトを占める。

8段になりますと、もう技はどうでもいいんだ、心だけだと・・・ですから先程の話ではないのですが年いって若い人がかかってくるきてくれないというのは、もう技では到底、若い人にはついて行けない、いわゆる瞬発力、スピード、体力、そういうことを十分に考えての上での考え方ですけど、それに対抗しようとしても到底かなわない訳で、それをどうカバーするかということが心である訳なんです。いわゆる理なのです。ですからいつまでも技だけで剣道をしていこうという考え方を持っているとそれは到底できないと、ですから、理合いというものを、しっかりと身につけることが大切になるわけです。稽古をすれば稽古をただけにそれが自然と分かってきます。理が無くして打てないとよく皆さんの試合のときに前へ前へという前へ出たら必ず打つ、大事なのは相手が自分の攻めに恐れているかどうかということの確かめがないままに前へ出ればいい、先に打てばいいと、そういう感覚で稽古をしている限りではこれは到底年いって面は付けられる状態にならん訳です。ですから、劍先の攻めあいの中でいかに自分の劍先が相手の心の平安を乱しておるか、それをしっかりとわきまえてそして打つか、あるいは引き出して打つか、その辺の理をしっかりと考えていく、それが大切なわけです。ただいたずらに打ちたい、勝ちたい、それだけでやっておると理が見えて来ないということが言えるのではないかと、ですから今皆さんが稽古あるいは試合の中で確かに、面あるいは小手もあるいは胴も打って勝った負けたのということになる、ちょっと疑問符を付けたいということになるのです。ですから心のこだわりを捨てて打たれれば打たれたでいいわけです。それは反省の大きな材料になるわけですが打たれた、悔しいということだけで、解決していくと理が見えてきません。どうして打たれたか、その反省があれば理はおのずからみえてくるということではないかと思えます。昔から打たれて強くなれということをおたしの子供の

ときからよく言われてきた言葉ですけれどただ単に打たれればなしで強くなるのではなく打たれることを恐がる心を除くために打たれると打たれることを嫌がる心のこだわりを除くそのために打たれていくと、ちょっとおかしい言い回しですけど、ようは私だけがいい子になって相手にはいい子にさせない。そういう気持ちがあったのでは到底ほんまものに届きませんよ。それがこの4番目の所得を求めるといふことに、つながるのだと思います。ようは心のこだわりを持たずに稽古することが1番いい方法です、と考えて理解すればいいのではないか、そのように思います。



5番目は、正師につけ、正しい、素晴らしい先生につけということで、本当は私はこれが1番目にくる方がいいのではと思うのですが。しかしまあ5番目の方が道元禅師が書かれたんですが、5番目が正しいかも分かりません。いずれにしてもいい先生に師事するということの大切さをここで言っているわけです。これは禅の道も、剣の道も変わらないわけで、常に素晴らしい先生に付くということが1番大切なことだということは皆さんが1番よく理解されていることだと思います。

最近の剣道の話。時たま名鑑なんか見ますとあなたの師匠という欄があります。その欄に随分の多くの先生の現代のそうそうたる先生の名前を羅列してる方が多いようです。ですけれども、私はそれにはちょっと疑問を抱くわけです。私はそういう欄には亡くなった酒匂久先生をやはり書いております。というのは、私の剣道の日々の修行の目標は師

みんなへの願い

大塚 忠義

1. 面をつけた時と普段の生活

24時間のゼミが終わり、みんなのさわやかな顔が印象的でした。

みんなは面をつけるとそれぞれが個性的な姿になります。しかし、普段の時、つまり、面をつけていない時は大抵は無口せあり、だれが誰なのかよく分からないことが多いと思います。もっと、おしゃべりであっていいし、ぼろをだしてもいいのではないかと。気取っているとか、失敗を恐れているとか、多分に遠慮がちです。

剣道のよさは、遠慮なく自由に自分を出して、思い切りできることにあるのかもしれない。スポーツのよさも同じだと思います。それによって色々な人と切磋琢磨して自分を、そして他人を互いに高めあうことができるのだと思います。

しかし、普段の生活では上下の関係や複雑な人間関係をまともにまわすことができず、いきなり、遠慮なく自由に振る舞うことができにくいのが現実です。残念なことです。

面をつけるやいなや、みんなが自分の相手をさがし、その人の技と戦い、自分を高めると同じように日常の時間が費やされたら、どんなにか多くのことを学べるのではないのでしょうか。

2. 剣道の向こうにある世界に

ゼミナールに二人のイタリアの大学生が参加しました。一人は剣道はしませんが、日本の文学に関心をもって日本語の勉強をし小説を読んでいます。もう一人は世界剣道大会に参加した人です。この青年も剣道だけではなく、日本の文学に興味をもっています。

片言の英語、片言の日本語ですが、彼らが並々ならない程、日本の歴史、文化、芸術、地名、人名を知っていることに驚かされます。

なぜ、そうなったのか？剣道をしていない青年は盆栽の本を読み、それに関心を持って自分でも盆栽を育てるようになってから、その哲学というか考え方を知りたくなり、とうとう日本文化のことになったとっていました。

もう一人の剣道青年は、黒沢明による「羅生門」という映画がきっかけで日本の小説を読むようになったということです。それが剣道に近づいた一歩であり、

日本文化の世界に導かれたとのことでした。

みんなにとって剣道を始めたことはフットしたことだったでしょう。きっかけはともかくそれだけに止まることなく、その向こうにあるものに関心を広げて欲しい。技の上達で勝利への執着でも、友達ができるでもいい。きっかけは。

一つの特異なことの向こうには普遍的世界があると思います。一つの入り口だけにとまるのを○○馬鹿、それを広げて自分を豊かにしていくことが大事ではないでしょうか。

今、日本の剣道はそれぞれの個人の感性や思想、そして生活よりも、剣道の○○を大事にするという方向となって、窮屈になっているように私は感じます。感性や思想や生活は押しつけられるものではありません。悩みながら行きつ戻りつつ選択していくものです。剣道を通じて、これをきっかけとして、独自の関心や興味を育てて、個性的な人になってください。

リーダーズセミナーを担当して

鳴門教育大学 木原 資裕

昨年（平成8年）の新人戦が終わって、鳴門教育大剣道部の稽古の際に、「今年度のリーゼミを鳴教が主管することが正式に決まったから、そのつもりでいるように。」と部員に話しました。部員たちからは、「ウソー！？鳴教でやれるのですか。この部員数（男子3名・女子2名）で大丈夫ですか。」と反応。私としても内心不安な点が多々ありましたが、「基本的には、稽古する場所と参加者の宿泊できる場所さえ確保できれば後は何とかなるから・・・また、鳴教でできればあとに続く部員の少ない大学にとってもリーゼミ等を主管できる可能性を広げることになる。」と説得しました。

全国的にみても学連はどうしても大会中心の運営準備に追われており、幹事長や幹事の心労は大変なものと思われます。そのような状況の中で、学連独自のしかも加盟大学のニーズに応じた企画であるこのリーダーズセミナーが開催され、今回で4回目というのはいずれのうれしい限りです。

これまでの参加者の話を聞いていると「個人の自由か、部の結束か」「いかに新入部員を確保するか」「入部したものをやめさせない活動とは」「いかに効率よく技術アップできるか」・・・といった「剣道」という共通点を持ちながら、同じような悩みを持っていることを再確認しました。

リーゼミの1つのテーマは「出会い」であると思います。「出る」と「会う」、自分に小さな殻から出ることが新しい「出会い」を成立させる第1歩です。どんなにいい内容の企画であっても、参加者が自分の小さな殻を出ることなしには本当によかったと言えるセミナーにはならないと思うのです。今回の堀江先生の講演の中で、どんなにすばらしい人との出会いがあったとしてもそれを感じ、受け止める自分の大きさがなければ出会いは成立しないとの主旨の話もありました。まさに剣道を通していかに小さな殻にいる自分を大きく開くことができるかという実践が課題であると思います。

これからのリーゼミを充実させるために、わたし個人のレベルで今後必要と思われることを以下に書きます。参考になれば幸いです。

1 リーダー選手権大会の充実と権威づけ

リーダー選手権は第3回リーゼミで企画したもので、今回2回目です。審判・運営も参加リーダーが相互に行い、判定制を取り入れて行われています。各大学のリーダーが集い、この選手権をぜひ取りたいと思える魅力ある大会になれば参加率も上がり、リーゼミ自体の成果へも波及すると思います。

2 稽古や懇親会への地元OB参加の呼びかけ

地元の学連OBに活動状況を知ってもらうことを大事にすべきです。少なくとも審判員に登録されている先生・先輩には稽古や懇親会への案内が必要と思います。

3 リーゼミの報告書を充実・配布

関係者はもちろん参加できてない大学へも配布し、リーゼミの内容の共有かと次回への参加意欲の喚起につながるような編集工夫が必要と考えます。

4 剣道部の活動が停滞している大学への配慮と激励

部員数が少なく、また指導者もない大学にとって部を維持するのは大変なことでしょうし、またリーダー自信がこのセミナーに出てくることも躊躇している場合も多々あると推察します。そうゆう場合に決め手になるポイントは人間関係です。ただ一通の文書だけでは人は動かさないでしょう。幹事長や担当の幹事よりの心のこもった電話や手紙での激励やセミナーへの誘いができれば、躊躇している人を引き付け、リーゼミがさらに充実するでしょう。

第4回中四国学生剣道連盟

リーダーズセミナーを終えて

香川大学 山神 真一

今年で4回目となったリーダーゼミ。ほぼ軌道に乗り、体制も充実してきたように思う。第1回目岡山大学、第2回目か香川大学、第3回目福山平成大学、そして、平成9年4月5・6日の両日鳴門教育大学が主管となり、木原先生のお世話のもと学生中心に展開された。リーダーゼミのお手伝いをさせてもらったが、詳細については木原先生におまかせし、また、総括的には大塚先生におまとめいただき、私は思いつくままに感想を述べさせていただく。

まず、私は香川大学の学生とともに鳴門教育大学を訪れたが、集合場所の体育館の正面で木原先生が大きなたて看板を準備されていた。出会うなり、「今までにこんな看板はなかったでしょう。MACで作ったからね。」と木原先生。「ご苦労さまです。」と私。リーダーゼミが手作りであることを象徴した1場面であり、木原先生のリーダーゼミに対する思い入れを感じたひとコマであった。そして、しばらくして大塚先生がイタリア人のレナートとジョバンニを引き連れて登場。レナートは世界選手権の個人戦に出場した剣道2段の持ち主。ジョバンニはレナートの友人で日本文学専攻の大学生。リーダーゼミも国際化し、参加者にとっても大いに刺激になった。今年が目玉は初日夜の班別討論であったが、テーマが絞り込めず、今一つ盛り上がり欠けていた感じがする。しかし、その後に行われた堀江先生の講演はとても内容が深く、有意義であった。個人的には、礼儀の三儀(辞儀・行儀・書儀)のお話が大変有益であったし、感動すら覚えた。堀江先生の現在の県道に対するやさしく、思いやる姿勢がひしひしと伝わってきた。先生の真意までは到底理解することはできないが、その入口を感じさせていただいたことに感謝の念でいっぱいである。学生諸君の聞く姿勢も非常に良かったように思う。学生にとっても堀江先生を身近に感じたひとときではなかっただろうか。その後、夕食と懇親会を兼ねて宴が催されたが、少し残念だったのは良い意味ではめを外す学生が少なくなったことである。多くの人を楽しませる芸(話術・パフォーマンスその他)を発揮することもリーダーシップのある一面でもあると思う。様々な場面で良好なムードを作ること。一人でできなければ協力して行う。そのな人間模様が私は好きです。それは、危機的場面になるほど色々な効力を発揮してくるものと思うからである。ところで、危機的状况と言え、最近では、あのペルーの事件が記憶に新しいが、私は助けられた

直後の青木大使のコメントがとても印象に残っている。それは、大使が述べた危機的状況を支えた4つの言葉である。すなわち、「団結」「自尊心」「勇気」「忍耐」である。見方を変えれば、リーダーとしての基本的な心構えを言っているのではないだろうか。日々安穏と生活していた私にとってはまさに頭を後ろから打たれた思いにかられた。

これからもリーダーゼミは継続されていくものと確信しているが、ぜひこの基本的な心構えについて思いを寄せる視点を今後も大切にしてほしい。そして、一大学のリーダーに留まらず、中四国のリーダーとしても大いに貢献できるリーダーになってほしい。

最後になりますが、主管をしていただいた鳴門教育大学の木原先生並びに剣道部の皆さん、本当にお世話になりました。霧の鳴門ハイツが忘れられません。また、中四国学生剣道連盟事務局の学生諸氏に心からお礼を述べたいと思います。

リーダーズセミナーを主管して

鳴門教育大学 桧原 健助

島の中にポツンと建つ我らが鳴門教育大学。バスも1日数本しかないこの交通の便の悪い地で4月5・6日の2日間、リーダーズセミナーが行われました。両日ともあいにくの雨模様でしたが中四国の大学18校42名が（無事）集いました。

合同稽古では、高知大の大塚先生、香川大の山神先生、我が鳴教大の木原先生、そして今回はレトナさん（世界大会・イタリア代表）をお迎えして、いろいろと先生方にご指導を頂きました。

ディスカッションは、皆さん各大学のリーダーということで、部の現状をよく把握しており多くの意見が交換され充実したものとなりました。

講演会には、徳島の堀江幸夫先生をお招きして、先生の師のお話、剣道における理（心）の大切さ等いろいろなお話をして頂きました。

懇親会は、山神先生（夜の部顧問？）のお陰で大変盛り上がることができました。

この他、中四国リーダー選手権もあり、その中では試合を行うと同時に審判のやり方についても教わりました。このようにして1泊2日のセミナーは、あっと言う間に終わりを迎えました。

現在、鳴教大剣道部の部員数は男子4名、女子2名と中四でも最も小規模ではないでしょうか。しかし、こんなに小さな鳴教大でもリーダーズセミナーの主管ができたんだと、部員全員なにか自信をつけることができたように思います。

このリーダーズセミナーは年に1回ではありますが、このように各大学のリーダーが集まり、それぞれが抱えている悩みを出し合い、合同稽古で剣を交えて交流を深めることで、団結力が強まり中四の1員としての更に強い自覚を得られるよい機会ではないかと思います。堀江先生が講演会するとき「技ばかりではなく理（心）を磨かなければならない。」とおっしゃいました。試合が技を試す場であるとするならば、このセミナーはまさに理（心）を磨くよい場となるのではないのでしょうか。

リーダーズセミナーは今年でまだ4回目です。学舎が島の中にあり、交通の便も悪く、部員の数も少ない大学。今回この鳴教大でリーダーズセミナーを行えたことにより、木原先生もおっしゃっていましたが、今後主管として名乗りをあげてくれる大学が増えるのではないかと思います。また今後この意義あるセミナーに一校でも多くの大学が参加することを期待しています。

最後に、堀江先生、大塚先生、山神先生、木原先生、並びに初めてということで至らない点が多々あり御迷惑をおかけした中四の役員の皆様に深く感謝致します。

常任幹事 柴田 隆義

今回のリーダーズセミナーは、各大学の部の運営をどのようにしていくか？という点を重視して行われました。1日目には、班に分かれてディスカッションの時間をとり、2日目には、反省会で各班の代表の人に発表してもらおうといった形式をとりました。このディスカッションを通じてみんなで話し合い、各大学の悩みを共有できたことは、これから部を運営していくうえでとてもいい勉強になったと思います。またこのことは、これからの中四国学生剣道連盟の発展にもつながります。

また、合同稽古や試合で世界選手権出場のイタリア代表の選手と一緒に剣を交えることができ、剣道を通じて国境を越えた交流ができたことは、とても貴重な体験になりました。

リーダーズセミナーは、各大学が意欲的に参加してくれて初めて成功するものです。そして、各大学がここで学んだことを部の運営に生かしていくことが、部の発展、さらには剣道の発展にもつながるのです。このことがリーダーズセミナーの本当の目的です。今回のリーダーズセミナーが、今後の各大学の発展につながれば大変うれしく思います。

最後になりましたが、木原先生、大塚先生、山神先生そして会場を提供して下さいました鳴門教育大学の皆様、本当にありがとうございました。